

追悼

元会長 平野弘道先生の急逝を悼む

安藤寿男



写真1 創立75周年の2010年日本古生物学会年會にて（つくば国際会議場にて）

2013年4月16日、平野先生の研究室を訪ねた。その年の3月11日に採択連絡がきたばかりの地質科学国際研究計画（IGCP）608の、第2回国際シンポジウムを早稲田大学で開催するお願いをするためである。「弟子のたつての頼みを断るわけにはいくまい」との男気のある二つ返事であった。まさか、それが先生のお元気な姿に接する最後になるとは、夢にも思っていなかった。

本会元会長で、早稲田大学教授の平野弘道先生は2014年5月5日に脳腫瘍のため急逝された。享年68であった。

ご経歴と恩師（鹿間時夫、松本達郎先生）との縁

名古屋市私立の名門東海高校を1964年に卒業後、横浜国立大学教育学部地学科を経て、九州大学大学院理学研究科地質学専攻を修了され、1974年3月に理学博士学位を取得された。いずれの学校でも、多くの地質・古生物学者や教育者を輩出した有名な大御所の先生との出会いがあった。特に、横浜国大の鹿間時夫先生と九大の松本達郎先生については、学生との酒宴の席などでしばしば多くの思い出や鮮烈なエピソードを熱く語られていた。そうした師弟の縁の中でご自身が成長された道程を引き合いにして、自分の研究室や、時には他の研究室の学生や卒業生に対しても激励と賞賛を続けられたが、そのおかげで多くの門下が勇気づけられた。

先生は、九州大学助手を経て、1977年4月に早稲田大学教育学部地学専修専任講師として赴任され、1979年からは助教授、1985年より教授（大学院理工学研究科兼任）として縦横無尽の活躍をされた。

研究：アンモナイト古生物学・白亜系層序と古環境

ライフワークとして取り組まれたアンモナイト研究の端緒となったのは、卒業研究に続いて修士研究として行った山口県のジュラ系豊浦層群におけるアンモナイトの分類学的研究である。博士課程在学中には、日本古生物学会論文賞（1973年）の榮譽を受けている。

博士研究では、フィールドを北海道の白亜系蝦夷層群に移して層序学やアンモナイトの進化古生物学に取り組まれ、*Gaudryceras* 3種の層序的・地理的分布、個体発生、形態型やその個体数比の時系列変化を定量的に解析し、系統関係を推論した。この研究は集団や遺伝の概念を化石種に適用したものとして注目を集め、今日の進化古生物学の礎となった。この功績により、松永記念科学振興財団研究奨励賞（1975年）を受賞されている。

早大に着任後は、「白亜系化石層序対比の確立」、「アンモナイト進化古生物学」、「白亜紀の古環境学」を三本柱に、野外地質学を軸足とした活発で広範な研究を、学生や共同研究者らとともに長年にわたって取り組まれた。そして、1990年には、こうした学術的業績に対し日本古生物学会学術賞が授与された。

白亜系年代層序学の継承と高解像度層序の確立

平野先生は、日本の白亜系化石層序学の先駆者である松本達郎先生からその学風を直弟子として継承されており、国際地質科学連合（IUGS）国際層序委員会の白亜系小委員会において委員（1998～2008年）も務めている。

アンモナイトやイノセラムに留まらず、微化石（放散虫、有孔虫、花粉など）を用いた化石層序や、安定炭素同位体比の変動様式を用いた化学層序を確立する研究を、長きにわたり北海道各地の白亜系で行っている。そして、欧米の模式層序やその相当層との国際対比にも積極的に取り組まれた。欧米での研究集会にも参加され、巡検で訪れた際に撮影した著名な模式セクションの写真を機会ある毎に紹介してくれた。

自前でできない分類群の研究は、積極的にご自分の学生にテーマとして与えられ、多くの門下がこれに挑戦した。研究成果の早期発表のため、分析を学外の研究者に依頼することが多い昨今、研究者として熟成するには時間がかかるのを承知の上で、先生はそうした門下の成長を楽しみにして待っていてくれた。

白亜紀海洋無酸素事変と炭素循環・絶滅現象との関連

1980年のオックスフォード大学留学中に、Jenkinsら英国の研究者が提唱した海洋無酸素事変（OAE）の重要性をいち早く認識し、自身の研究に積極的に取り入れられてきた。蝦夷層群に含まれる有機炭素の安定同位体比

を解析することで、海-陸間の気候変動現象の同時性やOAE時の炭素循環についても議論できることを、日本で先駆けて示された。2003年の日本古生物学会第152回例会（横国大）での白亜紀OAEシンポジウム（化石74号）や、2004年年会（北九州市博）での会長講演では、それまでの研究や近年の研究動向が総括されている。これらは今日の日本の白亜紀古環境学の潮流につながる大きな礎となっている。

また、南京地質古生物研究所の沙金庚教授や李罡教授と連携して海外学術調査を行い、中国北東部の白亜系陸成層におけるOAE時の有機炭素同位体比層序の解析にも挑戦されている。採択率3割の狭き門であるにもかかわらず、お二人を長期外国人招聘研究者として立て続けに早稲田に迎え入れて立ち上げたプロジェクトであった。

海洋無酸素事変と生物の絶滅現象との関連については、例えば、日本産白亜紀アンモナイトの高精度多様性変動の総括論文（2000, 2003年）などで論じられている。また、北太平洋域に産するアンモナイト *Desmoceras* と *Tragodesmocerooides* への進化がOAE2に起因していた可能性も指摘されている。

多くの古生物学の啓蒙書・教科書と高校地学教科書

平野先生が本格的な古生物学の啓蒙書、『恐龍はなぜ滅んだか』（講談社現代新書, 1988年）、『史上最大の恐竜ウルトラサウルス』（講談社現代新書, 1990年）、『繰り返す大量絶滅, 岩波書店』（1993年）を立て続けに上梓された頃の、充実感を披瀝される様子は強く印象に残っている。私は研究室卒業生第1号の博士学位取得者として、1985年から3年ほど平野先生のもとで助手を務めており、先生の立場や多忙さがよく理解できていただけに、苦勞と喜びを共感させてもらった。

その後、ご自身を含めた最新の国内外の研究成果をもとに、生命史における絶滅や大量絶滅の意義、そして温室地球の環境変動を総括した『絶滅古生物学』（岩波書店, 2006年）を出版された。地質・古生物学学徒の必携の専門書として高評価を受けたことは言うまでもない。その数年前より出版社から原稿の催促を何度も受けていることを、幾度も漏らされていた。私大の教員が国立大に比べていかに忙しいかを身をもって感じていたので、初志貫徹して、どうしてこれだけの名著を世に出せる時間があつたのだろうと不思議でならなかった。

忘れてならないのは、日本古生物学会が監修した小学館の図鑑NEO『大むかしの生物』（2004年）であろう。先生が日本古生物学会会長（2001-2002年度）の重責を担われていた時代に企画された大判図鑑の著者印税の一部を、2004年の日本学会事務センター倒産による学会財産損失の補填のために拠出されたのである。いつも書類が山積みになった机に、さらに大部の出版原稿を重ねて、体を張って学会のために取り組まれていた。

さらに、教科書の執筆を通して基礎教育にも力を注が

れた。例えば、現行学習指導要領に準拠した「地学基礎, 地学」（数研出版）は、理系・文系を問わず多くの高校生に愛読されているが、平野先生はその中心的な執筆者のお一人である。

多くの学術論文の執筆と並行して、著作や教科書に取り組んでおられた姿は、私自身が大学の教員としてその年齢が過ぎてみると、時代状況の変化があるとはいえ、先生はどうしてここまで集中してこれだけ多くの業績を蓄積できたのだろうかと思嘆せざるをえない。

東アジアの白亜系地質科学への多大な貢献

平野先生は、1999年から2004年の6年間にわたって、アジア十数カ国が参加した、UNESCO-IUGSの地質科学国際研究計画（IGCP）434プロジェクト「白亜紀アジアの炭素循環と生物多様性における陸-海相互作用」のリーダーとして、6回の国際研究集会を主催した。これは岡田博有先生（九州大学名誉教授）が主宰したIGCP350を後継するプロジェクトである。まだ電子メールやインターネット環境が十分でない時代に、アジア各国の100名近いメンバーへの連絡やニュースレターの送付という膨大な実務を自ら率先してこなされた。

2000年1月26-28日に開催された、IGCP434の記念すべき第1回の国際シンポジウムは、日本古生物学会と共催で早稲田大学国際会議場において行われた。アジア諸国の成果と欧米での成果を統合的に議論することを目指し、欧米の著名な研究者も招聘して活発な議論が行われた。IGCP434の成果の一部は、平野先生自身が客員編集者となり、*Journal of Asian Earth Science*, *Geoscience Journal*, *Cretaceous Research*等の国際学術誌において論文集として出版されている。この他にも、中国古生物学会70周年、80周年記念大会において招待講演を行うなど、東アジア地域における地質学・古生物学の発展に多大な貢献をされた。

2014年9月4日、早稲田大学大隈講堂で行われる予定の、IGCP608「白亜紀のアジア-西太平洋地域の生態系システムと環境変動」の第2回国際シンポジウムにおいて、先生に20年来のアジア白亜系研究を総括する記念講演をしていただく予定であった。平野先生のIGCPを引き継いだリーダーとして、14年ぶりに早稲田大学に帰ってきたIGCPの国際集会以花道を飾っていただくことを楽しみにしていた。

先生の訃報に対し、海外15カ国38名の研究者からも弔電が届き、先生のアジアにおける学術交流の広さと深さに改めて感銘を受けた。ここに、南京地質古生物研究所・元所長の沙金庚教授の電文を紹介したい。

「平野弘道教授は世界でも偉大な研究者の一人でした。彼は地質科学、歴史、文学、そしてそのほか広く深い知識をお持ちでした。地質科学においては、アンモナイトや中生界の層序学の熟練した専門家であるばかりでなく、炭素同位体、テクトニクス、そして大量絶滅に関する卓

越した研究者でもありました。

彼は歴史、特に日本と中国の歴史にも非常に詳しい方でした。彼は唐王朝時代の詩を含む古代中国の詩を暗唱することができました。彼は大変上手な漢字を書いていました。彼は大変美しい歌を歌い伝統的な日本の踊りも舞う、特に早稲田、早稲田……と。彼は早稲田大学が大好きでした。(中略)多くの中国人はいつも彼と友好的で実りある協力関係を築きました。平野弘道教授は私の最高の友人であり、中国人の最高の友人の一人であり、科学者の最高の友人の一人でもありました。」

数多くの学術・社会貢献

平野先生は、日本学術会議の連携会員をはじめ、日本地質学会編集委員会委員、日本古生物学会会長(2001-2002年)など、多くの学術団体の委員会委員や委員長を歴任するとともに、文部科学省の学術審議会、中央教育審議会、学習指導要領の改善に関する調査研究会議、文化審議会、そして科研費審査委員等の要職も務めてきた。

本会のみならず、我が国の学術および教育の水準の向上への貢献は計り知れない。

平野研究室を中心とした多様な人材育成

1978年4月より開室した早稲田大学教育学部地球科学専修(1999年3月までは地学専修)の平野研究室は2015年3月で38期生が卒業する。卒業生は179名に達する。大学院から入った学生を含めて修士修了者が64名、博士の学位取得者が19名におよぶ。私大のマンプワーを活かして、上述した様々な研究分野の卒業研究や修士・博士研究のテーマを与えられてきた。さらにリモートセンシン

グや古脊椎動物学など、先生になじみのないテーマを学生が希望しても、理解を示され積極的に支援された。さらに、私のように平野研を卒業して他大学で学位を取った卒業生が13名いる。このようにたくさんの学生が平野研の門をくぐり、その多くは学術・教育・行政の各方面で活躍している。

平野先生はお酒を飲みながら学生と対話することが好きで、飲み会の頻度や重厚度も突出していた。学生と同じ目線で親しく語られることから、平野研究室の学生・卒業生だけではなく、他研究室の学生・OB、時にして他大学の学生、教員まで巻き込んで、交流を深めてきた。先生が、諸先輩から同輩、後輩、そして門下に、広く温かく声を掛けられ多くを励まされる場にご一緒して、何度楽しいひとときを過ごさせていただいたことであろう。

平野研究室の1期生として、私が知る先生のご生涯や時々の振る舞いを振り返りながら、平野弘道先生を偲ぶ一文をまとめてきた。しかし、僅かな紙数では紹介しきれものではない。地質学会ニュース(Vol. 17, No. 6, 2014年6月)、地学教育(67巻1号, 2014年6月)に、それぞれ、高木秀雄氏(早大教授)、川辺文久氏(文科省、平野研16期生)が追悼文を寄せているので参照されたい。

最後に、平野先生の研究・教育のご業績と古生物学および日本古生物学会への多大な貢献に敬意を表し、長年にわたり、温かいご指導を頂戴したことに衷心より御礼申し上げます。謹んで先生のご冥福をお祈りします。

合掌。



写真2 IGCP434第5回国際研究集会(2003年12月タイ)の集合写真。前列左から5人目が平野先生。右隣がIGCP434を後継するIGCP507のリーダーの李容鎰氏、その右が弔電を寄せてくれた沙金庚氏。